

# 西鶴と太宰治『新釈諸国噺』

——「猿塚」を中心に

宮 本 祐 規 子

## 1 はじめに

太宰治著『新釈諸国噺』は、計十二作の短編からなり、発表された時期に差はあるものの最終的には昭和二十年一月に刊行された単行本である。今更言うまでもないことではあるが、全編が井原西鶴の諸作品を翻案したとされる作品である。

既に先学の指摘が多々あるため、先行論文を大きくまとめておきたい。まず、西鶴を「世界で一番偉い作家である」(『新釈諸国噺』凡例より)と評価し、その作品をよく読みこんだ太宰の知識を高く評価する姿勢である。それをふまえ、太宰は西鶴の原典にかなり忠実ではあるが、大筋に関わりないところにはかなり太宰的な特徴を出しており、そこに西鶴を尊重する姿勢を見る、という指摘もある一方、山田晃氏は、<sup>2)</sup>太宰にとって西鶴はあくまで素材にすぎないとも述べている。次に、戦時中の作品であることを重視するものも多い。高田知波氏が聖戦完遂という単一価値基準が一層強化された時代に「個人的」な「選択基準を堂々と掲げていたことの意義を軽視してはならない」<sup>3)</sup>と述べるように、あえて西鶴を選ぶところは「一つには時流に対する抵抗」であり、且つ「一つにはぎりぎりの順応」<sup>4)</sup>

であったと捉え、そこに太宰の社会批判を見ることが多い。例えば、小泉浩一郎氏は西鶴を「隠れ蓑として利用した」<sup>5)</sup>とし、安藤宏氏は「闊達な笑いを含んでいた」ことを評価しつつも、「パロディの精神を組みこめえなかった作品であり、それは太宰の文学的方法が戦時下の文学的課題を文芸復興期に接続しえなかった限界を示す」<sup>6)</sup>と指摘している。その上で、各作品について、主に原典である西鶴本文との比較を通じ論じられてきたといえ、十二篇に通底するような全体的なテーマなどを扱う論文は多くないのが現状である。

一方、西鶴の側からこれを見たとき、管見の範囲では、西鶴を太宰がどの本で読んだのか、ということについて考察の対象となっていないようである。現在の目から見ると当時の翻刻には問題が多く、正確な本文とはいえないものがほとんどである。西鶴作品を原本で見る事は難しかったことを踏まえれば、太宰の西鶴理解に翻刻本文の占める位置は決して小さくはない。本稿では、『新釈諸国噺』における太宰治の西鶴の受容方法を確認した上で、その影響について私見を述べてみたい。

## 2 太宰治と『日本古典全集』

『新釈諸国噺』の執筆に際し、太宰が西鶴をどのように受容していたのか、という点については、山内祥史氏が『太宰治全集 第六巻』における解題において、堤重久氏『太宰治との七年間』と、津島美知子氏『回想の太宰治』所載の『新釈諸国噺』の原典の記述から、大正十五年から昭和三年までに出版された『日本古典全集 西鶴全集一〜十一』（日本古典全集刊行会）であると指摘し、堤氏のいう「文庫ほどの小型本」「厚表紙空色クロス張」と『日本古典全集』の特徴とが一致するので間違いないだろう、と述べている。そこで、『日本古典全集』の翻刻と西鶴原文との齟齬の比較表【表Ⅰ】を挙げる。（但し、『日本古典全集』（以下『全集』と略す）では西鶴原文の漢字を平仮名に直したり、読み仮名を送ったりしている場合が大変多いので、それらは煩雑になるため挙げない。又、旧字新字や異体字の差異なども特に問題となる場合以外は挙げない。また、原文の平仮名に漢字を当てている箇所は、「さて」「なり」などと読みに影響を与えないと考えられる場合についても特に挙げない。）

【表Ⅰ】西鶴本文との比較（西鶴本文は『定本西鶴全集』（中央公論社）に拠った。）

井原西鶴「作品名」		『日本古典全集』	
『西鶴諸国はなし』巻一の五「大晦日は合はぬ算用」		『懐硯』巻四の四「人真似は猿の行水」	
かち栗 餅突宿 すぐなる今の世	乾（かち）栗 餅掲く宿 直ぐなる世	愁の種なる三昧（まい） 白（しら）坂徳左衛門 かうばしく	愁の種なる三昧（しゃみ） 白（しろ）坂徳右衛門 香（かぐは）しく

い。）

【表Ⅰ】から、『全集』には西鶴原文との差異や表記の違いがあることが確認できる。当然、『全集』において原文の平仮名の多くに漢字を当てることは、読者にとってより理解しやすくするための工夫がなされていることと同義である。しかし一方で、その漢字は恣意的に当てられているため、無意識に校訂者の読みに読者は誘導されていく。それは、言葉自体の意味が限定されると言い換えられ、作品世界の読み方をも限定させていくことになるだろう。また、『全集』には挿絵がほとんど収載されていない。西鶴作品における挿絵の重要性についての言及は避けるが、少なくとも絵からの情報がないことは読者の作品理解に影響を与える点は考慮すべきである。しかし『全集』と原文との差異がどのような意味を持っているかには、管見の限り言及はない。時代背景を鑑みれば、多くの本を対照したとは考えられないことをふまえると、翻刻の誤りがあるというだけでなく、原文に忠実とまでは言えない『全集』を読んだことで、太宰の西鶴への理解に影響はなかったのだろうか。次項では「猿塚」を取り上げ確認する。

<p>牢人 棚かりて 薪にことをかき 柴の戸を明て 亭主罷出て 就夫（それにつき） あるじの申 去方 めいよ 十面つくつて 一命を捨る 昨日売候事 語合せたるよし 丸行燈の影 蓋につけて ゆげにて取付けるか 御主へ帰したし いなものになりて 給はれと願ひ 武士のつきあい</p>	<p>浪人 店かりて 薪に事を缺き 柴の戸を開けて 亭主の罷り出て 其れにつき 主人の申す 然る方 奇妙（めいよ） 十面作りて 一命を棄つる 昨日売る事 談（かた）り合はせたる好誼 丸行燈の陰 蓋に著けて 湯気にて取り着きける 御主へ返したし 異なものと成りて 賜はれと願ひ 武士の交際（つきあひ）</p>
<p>『本朝二十不孝』巻五の三「無用の力自慢」 四本柱のうち 勸進本 関脇に塩釜 山家 段子の二重廻り 両替見世 素読（そよみ）ならへ 分別らしき異見 もまたそなたも</p>	<p>四本柱の中（なか） 勸進元 関脇には塩釜 山所（やまが） 段子の二重廻（ふたえまはし） 両替店 素読（そどく）習へ 分別らしき意見 も其方</p>
<p>葉盛次郎右衛門 是に惱（なづ）み ころあて 妹背（いもせ） なるまじきものにあらず 夜半（やはん） あけの くりて 寵愛せられしも忘れ 給仕する躰（てい） 是にかゆるものなし 内義の取さばき 佛をまみえたし とまらず 木刀（ぼくとう） 菩提のためあしし むごく 竹の鉾（とがり） あの庵 跡巾はれし</p>	<p>桑盛次郎右衛門 是に懷（なづ）み 心当り 妹背（いもとせ） なるまじきものには非ず 夜半（よなか） 明日の 繰（あやど）りて 寵愛せられしこと忘れず 給仕する體（さま） 是に代ふるものなし 内義取捌き 佛に見えたし 止（とゞま）らず 木刀（きだち） 菩提の為惡（わる）し 酷（つら）く 竹の鉾（ほこ） 彼の庵 跡巾ひし</p>
<p>内儀 下々 つらくはす 胸（むね）さん用 難儀 明はの 僉儀 取 濟難し</p>	<p>内儀 下々（しもじも） 面喰（つらく）はす 胸算用（むなさんよう） 難儀 曙 僉議 奪（と）る 濟まし難し</p>

<p>不審耳（ききみみ）を立て 思ひ残す事 各別 とかくは縁組 此事をいはせ 悪みし 中にさしあげ 真砂に熱込 骸骨（あはらほね） 果敢どらず</p>	<p>聞き耳を立てて 思ひ残す事 格別 とかく縁組 此事云はせ 憎みし 宙に差し上げ 真砂に煮え込み 胴骨（あはらほね） 捗らず</p>	<p>『武家義理物語』 卷一の五「死なば同じ浪枕とや」 一覽の覚しめし立 国元を出し時 一子に丹三郎 十方にくれて暫く思案し 丹三郎義は 歎きの中 大川を越へたる 勝三郎</p>	<p>御一覽の覚しめし立 国元に出でし時 一子丹三郎 十方にくれて暫く思案し 丹三郎儀は 歎きの中（うち） 大川を越えたる 勝太郎</p>	<p>『武道伝来記』 卷二の四「命とらるゝ人魚の海」 惣じて 下座に相勤（つめ）し 山家 かかる事共も有 金内殿とてもお手柄 漁師 其うを更に見えざる 磯に寄藻を掻きさがし</p>	<p>総じて 下座に相勤めし 山所（やまが） 斯かる事もある 金内殿、とてもお手柄 漁師 其魚更に見えざる 磯に寄る藻を掻き探し</p>
<p>あるひ姪嬢にても 不思議 生金百両只取事 小判を取替され 有難仕合也</p>	<p>或ひは姪嬢にても 不思議 生金百両唯だ奪る事 小判を取り返され 難有き仕合なり</p>	<p>『新可笑記』 卷五の四「腹からの女追剥」 東の奥道奉行 夫の悪心に同（おな）じ 娘をふたり儲て 夫の悪事を 続きの絹の十疋有し 兄弟の中 姉をとまはずは 独りの物 それより心の外の欲心</p>	<p>東の奥、道奉行 夫の悪心に同（どう）じ 娘を二人設けて 夫の悪を 続きの絹十疋ありし 姉妹の中 姉を伴はずは 一人の物 其れから心の外の欲心</p>	<p>『世間胸算用』 卷二の二「言も只はきかぬ宿」 衣装着替て出た 駕籠 夕べ 爰 物好 三月からお中にありて 取あげ祖母 お見廻申した</p>	<p>衣装着更へて出た 乗物 昨夕 此處 物奇（ものずき） 三月からお腹に有りて 取揚婆 お見舞申した</p>

<p>おのおの日に比に悲みある 歩行目付</p>	<p>各日頃に悲みある 歩士目付</p>	<p>限銀 草々買給へ 笑ひがほ うれしかりし ぐんない嶋 脈がある人の事と笑ふ</p>	<p>現銀 早々買ひ給へ 笑面（わらひがほ） 嬉しがりし 郡内編 脈が有る人の事と嗤う</p>
<p>『日本永代蔵』巻五の五「三匁五分曙の鐘」 那波屋（なばや）殿 すたれる草履 世間と替り まして 座をメて 格気のよき事皆々思ひあたれり</p>	<p>那波屋（なばや）殿 捨てたたる草履 世間と異（かは）り 況して 座を占めて 格気強き事皆思ひ当れり</p>	<p>不義 面影をつくろひ 少し備（こへ）たるを望み けいやく仕申候</p>	<p>不議 面影をつくろひ 少し肥えたるを望み 契約仕候</p>
<p>『武家義理物語』巻一の二「我物ゆへに裸川」 本情に非 富貴にして愁（うれ）へ 川浪に取落し 明松 人の足手はしがらみとなつて 下知（げち） 一度に三銭さがし いづれにも心よく酒事 これを取べし けふをなりあひに暮しぬ 丸裸（まるはだか） 過代 武士（ぶし） 石流</p>	<p>本情にあらす 富貴にして愁ひ 川浪を取り落し 松明 足手はしがらみとなつて 下知（げち） 三銭さがし いづれにも心よく酒事 其れを取るべし けふをなりあひに暮しぬ 丸裸（まっぱだか） 過大 武士（さむらひ） 流石</p>	<p>『西鶴置土産』巻二の二「人には棒振虫同前におもはれ」 けいはくいひて帰る 月夜の利左門 何国に暮せしもしらざりし いはれしも口惜 ひけぬ心根 侘すまひ 吉州とよい中かといへば 釣佛棚の戸びら 着物 をのくかへる時 とぶしたしかた 明家 いな事がさはり うす雲</p>	<p>輕薄云ひて帰る 月夜の利左衛門 何国に暮せしとも知らざりし いはれんも口惜し 怯けぬ心根 住居 吉州かといひ中をいへば 釣佛棚の扉 著物 おのく眠る時 どうした仕方 空家 異な事がさはり 薄雲</p>

### 3 「人真似は猿の行水」と「猿塚」

「猿塚」の典拠としては、『懷硯』巻四の四「人真似は猿の行水」が主たるもので、主人公夫婦の落ちぶれた生活描写部分で、『西鶴置土産』巻三の三「算用して見れば一年式百貫目づかひ」の利用が指摘されている。「人真似は猿の行水」の粗筋を確認しておく。

太宰府の金持ちの娘お蘭は、色好みの葉盛次郎右衛門と恋仲になった。しかし宗派の違いから結婚が許されず、駆け落ちする。飼っていた猿と共に貧しい生活を送る中、息子が生まれる。猿に子守をさせて外出中、猿は母を真似てお風呂に入れようとした結果、赤ん坊を茹で殺してしまう。猿は七日間墓参後、竹で喉を突き死ぬ。嘆いた両親は、息子の墓の横に塚を作り、出家して懇ろに弔った。

右の典拠に関して疑義はないが、もともと西鶴『懷硯』は、「伴山」という僧が見聞した話をまとめたもの、という形式が基本的に作品全体をつないでいる短編集である。『懷硯』を論じる場合は、この

【表Ⅱ】「猿塚」の対照比較表

『定本西鶴全集』	『日本古典全集』	「猿塚」
① 白（しら） 坂徳左衛門	白（しろ） 坂徳右衛門	白（しろ） 坂徳右衛門
② かうばしく	香（かぐは）しく	かぐわしく
③ 葉盛次郎右衛門	桑盛次郎右衛門	桑盛次郎右衛門
④ 寵愛せられしも忘れ	寵愛せられしこと忘れず	主人の恩に報いるはこの時
⑤ 佛をまみえたし	佛に見えたし	もとの可愛い面影を見たし
⑥ とまらず	止（とゞま）らず	涙とどまらぬ
⑦ 菩提のためあしし	菩提の為悪（わる）し	菩提のため悪し
⑧ むごく	酷（つら）く	その様を見るにいいよつらく
⑨ 竹の鉾（とがり）	竹の鉾（ほこ）	竹の鉾（ほこ）

「伴山」の位置及び意味を避けては通れないが、太宰は「猿塚」ではその構想を一切採っていない。太宰が『懷硯』の中の一編としてはなく、あくまで「人真似は猿の行水」のみを切り出して利用した姿勢は、彼の西鶴理解に通じるものとして捉えておきたい。

さて、管見に入った『新釈諸国断』の先行論文中で、「猿塚」を中心に論じたものは他の章段に比べ多いとはいえない。杉本好伸氏は、太宰と西鶴を項目ごとに丁寧と比較検討し、登場人物たちの造型の差を中心に論じられ、木村小夜氏は杉本氏の論を踏襲しつつ、出家した夫婦が庵にとどまらない、という最後の部分の大幅な改変を「出家としての形があるために当事者にとつての問題が無自覚なまま放置された」と述べるなど、西鶴との比較を基にした作品論が主と言える。先行論文を踏まえ、本項では、前項の表を基に『全集』と西鶴原文との差異がどのように太宰の作品構成に影響しているのかに注目したい。煩雑にはなるが、『新釈諸国断』中の表現に『全集』の影響がわかる部分を再度【表Ⅱ】に挙げる。

まず、①お蘭の父親の名前と③男性主人公の名前の違いである。ここは、杉本氏は「ここでは置いておく」とのみ触れ、木村氏は注で『日本古典全集』では「徳右衛門」「桑盛」と誤る」とのみ触れているが、右の表から扱ったテキストに従っただけの表記と考えられそこに太宰の作爲はないと見てよいだろう。ちなみに、『新釈諸国噺』執筆時に刊行されていた西鶴の翻刻には『日本名著全集』（昭和四年刊）『現代語西鶴全集』（昭和六年刊）などもあるが、それらに「徳右衛門」「桑盛」としているものはないので、太宰が『日本古典全集』を読んだことへの傍証ともなっている。また、お蘭の美しさの描写の部分について、近世の表現である②「かうばしく」に、漢字「香」が当てられた上で「かぐはしく」とルビが振られている『全集』の読みを踏襲し「かぐわしく」と表現していることが確認できる。同様に、子供が死にお蘭の涙が止まらない様子を、⑦「とまらず」としている個所に、漢字「止」が当てられた上で「とどまらず」とルビが振られている『全集』をそのまま利用して「涙とどまらぬ」と表現したことがわかる。

次に、猿がお蘭に④「寵愛せられしもわすれ」てかいがいしく働く、という箇所である。西鶴では、「寵愛」され恵まれていた昔の状況を「忘れ」て働く猿を描くという、裕福であった過去と貧しい現在の状況との比較に過ぎなかった描写が、「寵愛せられしこと忘れず」と翻刻されたことにより、昔「寵愛」された恩を「忘れず」に主人に尽くすという猿の心情描写に変化し、猿に人間味が加味された。これは、西鶴が「猿」としか呼ばない動物に、太宰は「吉兵衛」と名前を与えた変化にも通じる。また、猿の過失により殺されてしまった息子の⑤「倂をまみえたし」とあるのを「倂にまみえた

し」と翻刻する『全集』を踏まえ、太宰は「面影を見た」と描く。ここでは、その焦点の当て方が、息子からお蘭に変化しているといえる。同様に、その場面における視点が変化しているといえるのが、子供を殺してしまい手を合わせて詫びる猿の姿を見てお蘭が⑧「むごく」思うのを、「つらく」感じると翻刻する差異である。子供を殺された怒りに任せ猿を殺そうとしたものの、詫びる猿を殺すのは「むごくてかわいそうだ」と思う猿に対するお蘭の心情が、吉兵衛の詫びる姿を見るのが「つらく感じる」という自分を主体に据えた心情描写に変化している。この『全集』の翻刻を踏まえた太宰は「その様を見るにいいよつらく」と描写し、やはりお蘭に焦点を当てている。ここは、西鶴では行動を男に委ねていくような、特筆すべきものではなかった性格に描かれるお蘭が、『新釈諸国噺』では逆に男を引っ張っていくような気が強い性格に描かれることに繋がっているように考えられる。

最後に猿が咽喉を突き刺す⑨「竹の鉾（とがり）」に「ほこ」とルビが振られた箇所を挙げる。原文の「竹のとがり」とは「竹のことがつた先」を意味し、自然にあったと思しい尖った竹だったのが、『全集』では「ほこ」と呼ぶことで、自殺用の道具として作り出したもののような印象を受けるものになっている。この差異により、猿は贖罪として可能な限りのことをしたという設定に変化していると言え、猿が抱いていた子供を殺してしまったことへの罪悪感により多大なものとして読者は受け取ることとなったのではないだろうか。そして太宰は、ここをやはり「竹の鉾（ほこ）」としているのであり、これは、先述した猿への人間味の加味へと通じよう。野坂幸弘氏は「結末の2ページほどは、ほぼ原文どおりである。これ（『新釈諸国

「嘶」において「引用者」は数少ない例ではあるが、ここには「空想」の余地はなかったようである<sup>12</sup>と述べるが、原文にはない吉兵衛が「夜も眠らずまめめしく二人を看護し」「夫婦すこしく恢復せし」朝に首を突く様子は、西鶴の猿に比べ、より一層夫婦の子供のような、人間に準ずる存在であったことを強調させている。そう考えるなら、猿を失った夫婦の悲しみの質も変化しているといえるだろう。西鶴ではあくまで家来としての猿の忠義に感動し出家する。しかし、『新釈諸国嘶』では、より夫婦にとって近い存在であり、吉兵衛を失うのは息子を二重に喪失したようなものだったとも言える。それ故に、夫婦は喪失の地である庵には留まることが出来なかったのではないだろうか。庵で読経を続ける西鶴の夫婦に比べ、より悲しみが深いからこそ「ふたたび庵に住むも物憂く」感じられる結末に繋がる。

以上を踏まえると、太宰が原典に比べ、猿をより人間的な存在として描いたことが多くの原典との差異を生み結末部分にまで繋がっている。『壞硯』の挿絵には上着を着た猿が描かれるが、『全集』に挿絵はなく、絵からの影響は考え難いため、その構想には『全集』の本文が一つの方向性を与えたという可能性を指摘しておきたい。

#### 4 まとめ

太宰治は、西鶴をよく理解していたといえるのだろうか。何を以って理解しえたというかは難しいが、少なくとも西鶴の原文を、今日考えられる正確な翻刻で読んでいたわけではなかったであろうと推測できることは、確認してきた。最後に、紙幅の都合上簡単ではあるが、太宰の解釈姿勢について触れておきたい。

野坂氏は「原文と比較しながら読んで一般的にいえることは、作品として独立するための操作がいろいろとなされている」と述べ原文の「論理的整合性への配慮がなされ」「登場人物の物語の中での関係が明瞭」且つ「効果的に位置づけられ」「人物の行動や事件などに性格的・心理的解釈が付与されている」ことなどを指摘し「総じて太宰は西鶴をよくとらえ」「原文の勘所をよくおさえている」と評価している。しかし、太宰が『新釈諸国嘶』にまとめた西鶴作品を見ていくと、読解は大変に妥当な素直な解釈であったように思われ、そこに太宰独特の視点を見ることは稀である。むしろ十二編を通じてみていくと、太宰の語りたいことは表面的な滑稽さに集約されていつてしまっているようにも思える。その点では、西鶴自身への敬意・憧憬などをみるよりも、先述した山田氏の指摘のように、太宰は西鶴への尊敬の念などはなくあくまでも素材としての利用に過ぎないと見る方が妥当かもしれない。

例えば、太宰は「貧の意地」における内助の造型において、原文の「直ぐなる今の世を横に渡る」男である、つまり武士らしい清廉潔白な生活をしていたわけではない、無理を通すような男という毒を含む設定を削り、何をやっても駄目な男というある種愛すべき滑稽な人物に改変する。西鶴原文では、内助の性格設定を踏まえると、最後の「武士のつきあい各別なり」という一文に、普段から武士らしい行動などしない男が、自分の周囲の人の前だけで武士たる心がけをしようとするこへの皮肉な目が伺える。しかし、太宰は「女房」を「可憐に緊張」させるような武士の矜持を失わないことへの賛美の目として描く。そこには武士の気概を失わない浪人という型通りの理解が透けて見える。「義理」における丹三郎の造型につい

でも、従来西鶴が何も触れていなかった丹三郎の性格・行動などを

勝太郎に比べ大変劣る若者として描くことで、原文から読み取れる若君及びその父である主君への批判的な目をそぎ落とす。この点については、戦時中の執筆と言うことで、主君への批判的な描き方はそのまま国家及び体制批判へと見られる恐れがあったためにわざとやめたと考えられるのかもしれない。しかし西鶴においては、丹三郎もまた式部親子と同様に、無謀な若殿及びその父親、属する社会の被害者であったが故に、丹三郎の親達の出家が意味をなすにも関わらず、太宰にはその視点が無い故に、丹三郎の親達の出家が世間体であったり式部への義理といった矮小化された理由に読み取れてしまう。そのため、前半で加味された滑稽さのみが目立つ。木村氏は「翻案は太宰治が得意とした手法の一つであり、」<sup>(1)</sup>「原典に依拠しつつそれとの間に差異を作り出したところで何事かを語ろうとする」方法と述べるが、本作ではその太宰の作り出した差異が生きていないために、語るべきものが薄まってしまっていると言える。

もちろん現代の西鶴解釈を当時にそのままあてはめるのは無理がある。しかし、太宰が『お伽草子』で見せる切れ味鋭い独特の解釈姿勢と、『新釈諸国断』のそれとは異なっているように見える。それは、太宰が商品として考えた工夫かもしれず、結果として作品の面白さにつながりその評価は販売冊数に表れたと解釈することもできよう。ただ、太宰が意図したかしないかに関わらず、結局『新釈諸国断』において作品の枠組みそのもののへの解釈変更ができなかった理由は、「世界で一番偉い作家」という言葉から単純に汲み取られがちであった西鶴への敬意ゆえではなく、西鶴の大きさに正面から取り組んだ結果だった可能性を再度考慮する必要があるのではない

だろうか。

#### 注

(1) まず見るべきは『国文学 太宰治必携』学燈社、一九八〇・七)『別

冊国文学 太宰治事典』(一九九四・十)『太宰治作品研究事典』(勉誠出版、一九九五・十一)『太宰治大事典』(勉誠出版、二〇〇五・一)であろう。これらによれば、太宰治作品における本作の評価は、「太宰の生前にあつては最も広く読まれた著作の一つ」であるものの、同時代評は否定的である。その他、小泉浩一郎氏「太宰治と歴史小説」(『資料と研究』二〇〇五・三)、前田秀美氏「遊興戒」『猿塚』論(『太宰治研究』二〇〇三・六)、木村小夜氏「井原西鶴と太宰治」昭和一〇年代・西鶴再評価の中で(『太宰治研究』二〇〇四・六)、勝原晴希氏「二人の諸国はなし」井原西鶴と太宰治(『江古田文学』二〇〇二・一一)、南陽子氏「太宰から西鶴を読む」「義理」をめぐる悲喜劇(『近世文芸研究』と評論二〇〇二・一一)、佐藤隆之氏「太宰治『新釈諸国断』」(『解釈と鑑賞』一九九二・一〇)などを参照した。

(2) 山田晃氏「西鶴と現代作家」(『国文学解釈と鑑賞』一九五七・六)  
(3) 高田知波氏「猿塚」―(代行)と(代用)、喪失と解放(『太宰治研究』二〇〇三・六)

(4) 前掲注(2)

(5) 小泉浩一郎氏「新釈諸国断」論―「大力」「裸川」「義理」をめぐり(『日本文学』一九七六・一)

(6) 安藤宏氏「新釈諸国断」論(『資料と研究』二〇〇五・三)

(7) 筑摩書房、一九九〇

(8) 寺西朋子氏「太宰治『新釈諸国断』出典考」(『近代文学試論』一九七三・六)、山内祥史氏「太宰治と日本古典文学」(『解釈と鑑賞』一九八七・六)などを参照した。

(9) 木村小夜氏『太宰治 翻案作品論』(和泉書院、二〇〇一・二) 初出

「太宰治『新釈諸国断』試論―「貧の意地」「大力」「猿塚」(福井県立大学論集、二〇〇〇・二)

(10) 杉本好伸氏「太宰治と井原西鶴―新釈諸国断「猿塚」を中心に」(『安田女子大学国語国文論集』一九九〇・三)

(11) 『新釈諸国断』の本文は、『太宰治全集』(筑摩書房、一九九〇)に拠る。  
(12) 「新釈諸国断」(東郷克美氏他編『作品論 太宰治』双文社、一九七四・六)

(13) 前掲注(12)

(14) 前掲注(2)

(15) 「太宰治」という磁場―「吉野山」を視座として」(山内祥史氏他編『二十世紀旗手・太宰治―その恍惚と不安』和泉書院、二〇〇五・三)

本稿をなすにあたってご教示戴いた小澤純氏・藤木直実氏に心より深謝申し上げます。

## 受贈雑誌(八)

南山大学日本文化学科論集

新潟大学国文学会誌

二松

二松学舎大学 人文論叢

日本近代文学館年誌

日本言語文化研究

日本語学論集

日本語と日本文学

日本語日本文学

日本語日本文学論叢

日本大学大学院国文学専攻論集

学専攻

日本文学会誌

日本文学会学生紀要

日本文学研究

日本文学研究誌

攻

日本文学誌要

日本文学ノート

日本文学文化

南山大学日本文化学科

新潟大学人文学部国文学会

二松学舎大学大学院文学研究科

二松学舎大学人文学会

日本近代文学館

日本言語文化研究会

東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室

筑波大学国語国文学会

創価大学日本語日本文学会

武庫川女子大学大学院

日本大学大学院文学研究科国文学専攻

盛岡大学日本文学会

盛岡大学日本文学会

大東文化大学日本文学会

大東文化大学大学院日本文学専攻

法政大学国文学会

宮城学院女子大学日本文学会

東洋大学日本文学文化学会